

二つの顔  
（大人の童話）



蘭 藍子

それは、もう五十年前のことで、忌部は僕のたった一人の友人だった。そして、僕が強く感じたのは、彼が非常な情熱家で、貪欲なまでの知識欲と探究心の持ち主だということだった。いま思えばあの情熱と知識欲は、一途に無政府主義を夢見ていた彼の野心であり、強い願望だったのだろう。

僕だけは彼を認め信じていた。だが、回りの者を寄せ付けない、厳しさとイデオロギーと行動力が、彼らを遠巻きにさせていた。

僕はといえば、四国の山里生まれで、とにかく山から下りることを夢見ていた。そして何とか激しい肉体労働（荷役や沖仲士）までやりながら大学という所の門をくぐったのである。が、彼みたいなイデオロギーを持っているわけではなく、学問に対する情熱があるとは言いがたい。が、子どもの頃から土いじりや、夏になると必ずやるヤボ（焼畑）の儀式が好きで、わくわくしながら火入れの時を待った。

森のアオバトやシジュウカラが鳴いて、そして風がやんで、明日すぐ雨になるという時。山向こうの雲がこちらの谷川へと下りして来たら、その日だ。八月その日が来て、部落の衆が集まって、最初に僕の爺さんが口上を述べ、草むらにおばばが火を入れる。衆は手に持った笹竹の先で地を突き祈りながら、それぞれの場所から火を追い始める。

「このヤボ（焼畑）から……蛇、……ワクト（蛙）や……作物の菜を食う虫と。……早々にみな立ち去れ——。焼け残りがのうなるまで神さん護り給へ——。」

こうして山の斜面のてっぺんから下へ下へと炎をあやつり燃やして行く。火入れして凡そ二時間もすると、火が火を呼び炎が風を呼んで火の神と風の神とが渦になって、追いつ追われつ一カ所に集って来る。空模様はこのヤボが終わるのを待っていたように次第に暗くなり始める。

「すさぶる火の神様、風の神様、火の神様、風の神様、天国に舞い上がれ！」が最後の合い図で、爺さんも、おばばも、みなが唱えてヤボは無事に終わる。

四千年以上前から、縄文のヒトたちがやって来たことを、衆が縄文人になり切つて繰り返す。そして、千五百万年前頃まで活動していたこの四国の火山石鎚。そこへ降り積もった「鬼界アカホヤ火山灰」層の美味しい火山灰、真っ赤な土、これが日本の土だ。それが僕なりの考古学の原点だったのかもしれない。

八十年ほど昔になるが僕が子どもの頃、ヤボの後一番早く芽を出す採りたてのソ

バの実で、おばが作る団子汁は、鍋の中で蛙のように団子がピチピチ跳ねるのが面白くて、「ワクト」を箸でつまんで食いちぎり、白い息を吐きながら頬張った。

その頃は「神さんの山、石鎚」石鎚村だった。その後過疎化はこの村の人口も急激に減らし、現在では、たった残り一軒になって、四国西条市小松町石鎚ととなっている。遡れば先祖は平家の落人だということだが、当時は子孫二千五百人ばかりがひっそりと暮らす隠れ里が僕の郷里だった。僕は村を出るまで墓石が建ち並んでいるところを見たことがなかった。村では森の「さんまい」（死者を埋葬する）の奥深くに代々墓石の上に寝かせて葬られていた。僕は花や団子と竹筒の水を持っておばの後にについて行った。

そんな僕が寝起きする下宿を訪ねて来るようなモノ好きは忌部、彼以外には誰もいる筈がなかった。渋谷の道玄坂を大きく迂回しながら登り切って、大学のキャンパスの塀の裏側の狭い排水溝沿いに伝って行くと細い路地に出る。そこに僕の下宿がある。と言っても、そこは看板屋の仕事場と倉庫になっていて、仕事のある時はその親爺の手伝いもした。その倉庫への梯子の下の階段を寢床代わりに布団を押し込んで三角形の底辺に向かって膝を折り曲げて寝ているような生活だった。まるで死者が坐棺に納まったような格好で。しかし、彼にはむしろそれが面白く気楽で、気に入ったのかもしれない。

当時盛んな学生運動の最中、社会党や共産党などの革新勢力は「七十年安保廃棄闘争」「沖繩返還運動」がようやく「国民運動」になりつつあった。一方治安維持のしめつけは益々厳しくなって、彼は突然僕の下宿に潜り込んで来ることがあった。一斉検挙の目を逃れて、緊急避難場所として都合が良かったのだろう。

師走間近で、僕は二階の倉庫に上がって、大売り出しの看板の修理や塗り替えて看板屋の親爺の手伝いをしていたので、彼も慌てて上着を脱ぎ捨て早変わりして、一緒になって看板屋の職人に化けた。

二階の隙間だらけの掘立小屋の薄い板壁は風に震え、木枯らしに混じって、もがり笛のように僕の心の中を吹き抜けて行く、微かなシュプレヒコールが千切れるようにかき消され、道玄坂下の方へと消えて行く列に無縁な僕には切なかった。

別に同志でもなく、彼の運動を理解しているというわけでもないが、彼とは只素

朴な人間として心の根っこで繋がっているような気がする。しかし、彼はどこで生まれ育ち、どこに住んで、どんな生活をしているのか、話そうとしないし、僕もそんなことは必要としないので聞こうと思わなかった。そうこうするうち、二人はそろそろ卒論の準備をしなければならなくなった。

暫く彼は僕の下宿に現れなくなり、何事もないからだと自分に言い聞かせて、僕は安堵したり、内心寂しくもあった。が、やがて冬休みに入るというその日の夕暮れ時、珍しく土産に僕には手に入らない贅沢なインスタントラーメンなどの差し入れを持って、ひよっこり現れた。

昨日大学のキャンパスの掲示板で見たバイトで、この冬休み中考古学の地方の発掘調査の助手募集が、偶然それが四国だった。僕は忌部にそのバイトのことを伝えながら、二人は麺をフーフー吹き、黙って汁を最後の一滴まですすった。

その夜、彼は珍しくとても饒舌だった。

「実は、俺の先祖は『汲み取り』なんだよ。……」と独り言のように、言い出してみたり、ある意味謙遜とも受け取れて、僕は笑って取り合わなかったが、彼は自分の忌部という氏姓の始まりは、……と妙に気まじめだった。丁度看板屋の親爺が手伝ってくれたお礼だと焼酎を一本届けてくれたので、テンションが上がったのかもしれない。僕がレタスの塊を皿に乗せて出すと、二人は葉脈を千切って、焼酎と交互に口に入れる。

彼の顔が赤らんで来た。彼は権力とか差別とかそんな言葉を口にする時、激昂し顔が紅潮して来る。話の続きは僕にも興味がないわけではない。

「真面目な話さ、考古学的に言えば、古代は屎尿を処理しないまま海に垂れ流していたんだよ。白人（しらびと）今で言えば、統治する人、まあ、権力者だな。その神社には七十五人の宮人が仕えていた。元をただせば『ニギノミコト』のために建てた社で、生涯肥担ぎをさせず、身を清めて仕えさせていたんだとさ。君、滑稽と思わんか。おまけに参拝者の民衆は山の中腹へは登らせないように、川に沿って参拝させ、社が穢れないようにと。……滑稽だろ」

「その頃さ、丁度四国の阿波に忌部氏一族が流れついて、おそらく土着して集団になったんだらう。彼ら生活のため何をやったかと言うと、斃れた牛馬の処理や、河川不浄物の片付けなんか、穢れのすべてを清め処理する集団さ、誰もやらない事を。

……それから遂に乞食をする権利まで、すごいと思わんかよ」

僕はうっかり吹き出してしまった。ホイト（乞食）をする権利？ ホイトをするにも免許が要るんか？」彼は大真面目だった。

「いやしいと差別されていた職業の生活集団の権利の奪い合いの争いがやがて始まったのさ」彼はまた滑稽を連発していた。

「だって、のち、中臣氏と忌部はお互い古代の宮廷祭祀の勢力争いまでやって、今じゃ奈良の橿原に太玉命神社の神に納まっているってわけさ」彼の最初の話とは大分違う。謙遜どころか、彼の先祖の自慢とも受け取れて寧ろ僕は滑稽だった。

それを聞いていた僕だって考古学者の卵だ。やはり焼酎が回って来たのか僕もテンションが上がって来て、「日本の古代史の謎」に話が移って、彼の声がだんだん大きくなり僕も負けずに議論は沸騰する。紀元前三世紀頃から紀元四世紀頃までの「古代史の異常な空白さ」……。日本人の深層心理の空白」について、……お前どう思う？ 「そんなむつかしいこと急に言われても。……から始まって、彼の議論は続く。所どころ聞いていると、それは神武東征してから、……話はとんで皇国史観に走り、そのため世界第二次大戦へと、やがて突入して、日本は数百万人の犠牲者を出したんだ。……どんどん話が飛躍して行く。

「そりゃそうだけど……」イヤ、違うだろ。お前本当の気持ち俺に隠して言わない」僕は適当に相槌を打っているうち、いつの間にか眠ってしまったらしい。気がつくとき、彼の姿は深夜の闇の中に消えていた。

僕は予定通り、発掘調査の日が来てバイト先の四国愛媛へと発って行った。

それから調査記録を日記に書くことにした。

十二月二十一日（晴大霜） 気温二度 —— 十七度 八時二十分作業開始。

この発掘調査は、ここで旧石器時代の遺跡が確認されれば、愛媛の夜明けは縄文時代より遡ることになる。早急な調査が必要だった。やはり忌部は来ていなかった。僕はこの日の調査にはどうしても参加しなかった。昼食は山芋汁の大盤ふるまいだった。午後、現場作業員に対して講話があり、発掘についての注意があった。（一、東調査区に出土している祭祀遺構（集石）は、縄文後期、今から三千五百年ほど前に「犬除」で生活していた人たちが、心のよりどころとして石を並べ、一族の繁栄や狩猟、採集の恵み

を願った場所だから、大切によく注意する。具体的な細かい事は指導員の指導を受ける)

僕もこの年代は興味深い。忌部のこだわりは古代史の空白の謎だった。太古からのこの地方に生きたヒトたちの証を、後の大和朝廷が権力をより一層強力にするため、あらたに神話を創作し、それに都合の悪いものは包み隠して消され封じ込められた。とする彼の考えには僕自身これからが研究課題だと思っている。

十二月二十四日(晴) 気温三度 —— 十七度 八時二十分作業開始。

西調査区第三層発掘完了。東調査区第四層発掘開始する。東西調査区ともに全面アカホヤ火山灰層となる。(縄文時代七千三百年前、鹿児島南方の硫黄島・竹島付近に起きた巨大海底噴火……噴出源の海底には鬼界カルデラが残った。アカホヤ噴火は日本では最新の巨大噴火、その火山灰は日本列島全体に広く堆積、「アカホヤ」とは価値のないアカホヤ地層。赤い土のこと)

明日二十五日をもって、本年度の作業終了。明朝は朝礼を行うとのこと。

十二月二十五日(晴天霜) 気温三度 —— 十七度 八時二十分朝礼。

現場はシートをかぶせ、作業員に指示。花崗岩による岩陰・洞穴調査に参加出来る者は同行するよう伝える。

十四時洞穴調査に向く。巨大な花崗岩の岩陰自然構造あり、巨岩のうち重なった洞穴あり、旧石器人の住居は、ここを利用したのではないかと思う自然構造物、圧観である。

十六時終了。散会。次回は一月五日である。彼はとうとう来なかった。が、このまま渋谷のハチ公(駅前の銅像)が待っている雑踏の中へと僕は帰る気がしなかった。多少の収入も得た。さて、これからどうするか。……この近隣の村の詳しい絵地図みたいな物を渡されていたので、早速広げる。……宇摩の方に旅館があるのを見つけた。すぐ近くに郵便局もとにかくある。

考古学の教授が言う通りだ。「考古学を志す者は、まず自分の足で歩かねばならない。かつて人々が生きたであろう大地を踏みしめ、景色より何よりそこに住む人の話をよく聞くことだ。……研究はもうスタートしている」……とにかく僕は歩き出した。

僕が歩きたかった四国愛媛周辺（伊予）南予は、山また山が重なり、それが海まで突き出し、海岸は凹凸の著しいリアス式海岸になっていて山地形中心で、変な形をした無数の馬が寄り集まり、馬の背が重なり合って遊んでいるように見えて滑稽だ。僕は太古の邪馬台を想像したくなるからである。

こうした土地では縄文時代人は遺跡や戦乱時代の山城が集中する森に住み、秋には樹林にカシやシイの実などたわわになり、森に住む脂の乗ったシカやイノシシを狩り、河川や内湾で魚貝を捕る。森の住人と言われる縄文人の生活しやすい、海辺から山地まで愛媛の中に集中している。

しかし、太古の愛媛でも生活しやすい日当たりの良かった自然環境の「池の岡」が、北面背後の音無山（八五〇）や、それに繋がる四国山岳の高峰、讓ヶ葉森（一〇六六）など急斜面の脆弱な表層をもつ山地が繰り返し崩落して、縄文時代の海進による現象で、暴風多雨寒暖の不安や洪水による土石層の流出が著しくなった。

そんな自然環境の変化によっては縄文人は死に直面しなければならなかった。が、やがてその縄文海進にともなう気候の変動は、一面温暖化をもたらして、海辺での漁労も容易になった。かつての北面の「池の岡」より今度は「影平台地」南背面の「ゴンドウジ山（八一九・六）」を中心とする山地一帯が食料獲得、採取に好条件を備える。

「影平台地」に行けば生きて行かれる。縄文人たちは堅穴に住めるようになり、彼らは

移って行った。季節により、クリ、クルミ、ケヤキ、ミズナラ、コナラ、ブナ、カエデ、野イチゴやサルナシ、アケビなど豊穡な樹の実が食べられ、冬でも生野菜が食べられた。しかも大小の動物の肉にもありつける。昆虫が飛び交い触媒も盛んになる。また六千年前頃より、照葉樹林なども繁茂して、「山の民」（木地師）までが良質の原木を求めて住むようになった。やがて豚の脂が旨いので、イノシシと豚は顔が似ているからと、山で捕れたイノシシまで飼う。愛媛の古代はそれなりに輝いていた。

こうして、いままでに様々な文献を集め、ここまで辿り着いた土地を、実際に縄文人となって自分の足で歩いてみたい。卒論にもあらゆる条件から実証し得る邪馬台国は、どこのクニだろうか？ 僕はやはり四国にあったのではないかと想像しざるを得なくなる。

まだ結論は出ていないが、日本中にある数え切れないほどの邪馬台国。忌部は自分が古代史の空白の謎ブラックホールを埋めて、領地争いのない平和で、格差のない、平等に富みを分配する無政府共産主義に、書き替えることが、彼のイデオロギーの原点ではなかったのか。

とうとう、その宇摩郡に来てしまった。邪馬台国への入口、宇摩へ近づくにつれ次第に僕は高揚して行く。・十二月二十五日発掘調査が散会して、歩き出したのは十六時を少々回っていた。秋なら紅葉の絶景が見られるだろうに。冬の夕陽はみすぼらしく、あつと言う間にかじかんで真綿みたいな薄い雲の下に潜ってしまった。日没と同時に闇が訪れる。

もう今は真つ暗な崖の下の坂また坂道を調査用のライトをかざし、ひたすら照らしながら歩き続ける。山道には馴れているが、何か白い煙に似た濃い霧が地面から這い上がり体中に巻きついて不気味でもある。山仕度に身を固め、リュックを背負っているのに、歯がカチカチして小刻みに震える。この恐怖感は何だろう。

一日一回だけ宇摩の銅山川（伊予川）、金砂温泉辺りまでのバスが出るが、バスは宇摩に一泊して片道だけで、帰りが無い。

あの時は、バス停があった茶屋で聞いた話など、笑って聞き流していたが、……  
「入らずの森」「仏」とか言うのは、どうも気に入らない。地図にも出ていなかったではないか。（そこへの道は、六世紀頃だろうか、権力者の都合で朝廷からの依頼を受けた空海に結界されたと言う。そこを境に閉ざされ隠されたこの地方に生きたヒトたちの証が消され封じ込められたと言う）

そのこの入り口であろうか？ ……まさか。僕は道に迷わないよう磁石と地図を握り締めていたのに。……ライトを当てても、それが、どうも見えなくなった。宇摩に入ってから自ら描いていた邪馬台国への道を間違えたのではないか。一歩また一歩踏み込むにつれて、磁石の針が動かなくなった。時計の針は二十五日の十六時を少々回った所で止まっている。頭の中が混沌として来る。

（今ごろ忌部は何しているのか？ 彼があればど拘っていた謎の入口ではないのか？ ……こんな時まで彼を頼みにしている自分が腹立たしくなる）

たしか、古い文献にはなかったが、宇摩平野の南、法皇山脈だろうか。いくつか

刻まれた巨大な謎の女性像。二つは横顔だが、一つはやや、空に向かってる像は、顔立ちの一部が残っていて復元出来る。山の中腹より下が原生林で、上が邪馬台国の筈だった。

銅山川（伊予川）は別子山村の冠山北麓から源流を発し、その法皇山の山麓の岸壁には巨大な女性像が刻まれている。だが、この辺境の地、その辺りにはこれと言った中世の城跡のような石崖もなく、朝鮮式山城みたいな土塁も神籠石もない。山上と下とが戦って敗れた戦士の骨が谷底へと落ちて行く。

のち谷底から敗れた死者の無数の骨が出て来て、手足の谷とか、胴谷など……があると言う。

振り向くと銅山川（伊予川）を中に挟んで兩岸の山地に山村の明かりが点々として、遠く近くホタル火のような淡い光となって飛んでいる。……

刻一刻山の冷気が足下から立ち上り、鬱蒼とした樹海に入り込んだ予感が漂う。道に迷って、入ってはいけない森の入口へと足を入れてしまったのか。……子ども頃ふるる里の峠で、あの霧に閉じ込められた時の息もつけない乳白色にすっぽり嵌まって、視界ゼロになった。……これでは暫く目をつむり、じっとしてやり過ごしているしかなかった。（こんな時、忌部が居てくれたら、どんなに心強いだらう）

そして、どのくらいの時が経ったのか。……ふと、耳を澄ますと、聞こえて来る谷底を駆け抜けて行く多くの足音や叫び声が続く。そのざわめきがやんで目を開くと、僕は蔓橋の袂に立ち尽くしている自分を見た。どうして自分がここにいるのか、すぐには呑み込めなかった。

やがて落ち着いて見ると、吊り橋の半ばにヒトの首のようなモノが揺れている。と一瞬見たのは、小さな僕自身の目の錯覚で、それが朽ち果てた蔓の弦や根っこが垂れ下がったモノだと分かる。（どれほど古い昔に、ヒトの手で編み込まれた吊り橋であろう）

バイトのすぐ後の山道で疲労が重なり、眠気に引きずり込まれてしまって、歩きながら色々な長い夢を見てしまった。が、この先はどうなるのだろう。

ここはどこか？ ……随分歩いたが、やはり樹海に入ってしまったらいいらしい。磁石も動かない。辺りは気味が悪いほどやたら静まり返っている。

風一つない静寂な原生林が何かを僕に伝えるように、……微かな木の葉ずれの音

や小枝の折れる眩きがヒトの声となって囁きかけて来る。

僕はまた虚ろになって、半ば自分をもてあまし投げ出すように、太い樹の根にはしる一本の動脈の瘤を枕にしてごろりと転がった。……鼻先から苔の匂い立ち上がる。懐かしい苔の匂いを嗅いだ。ふる里のさんまいに眠るあの苔蒸した墓石の匂いだった。……もうこの辺で僕は夢から抜けて出して目を覚ましたい。

しかし、そうはいかなかった。

気がつくと、ちらちら、ゆっくり、ふんわり白いモノが降りて来る。僕の頬を濡らすひんやりした感触だった。……もしかして雪かも知れない？ 雪ならこのまま降り積もってくれ。僕を埋めてくれ。僕はすっかり大胆になって、僕の手足も体も頭の中で考えている煩わしい何もかも消してくれ。……風もなく相変わらず静かに雪は降る。また、うとうとしかけると。……

それは突然のことだった。

……すみれ色の川の流れに、白雪の小花を一面に散らした小袖を肩から掛けて、…… たしかにそう見えたが、……女はすぐに裾を翻しどこかへ消えた。

それは白い雪明かりで僕が見た一瞬の幻だったのか、……そんな幻覚は、實際姿形となつて現れる筈がなかった。(また、僕好みの両肩に長い髪を垂らした、貫頭衣にシカの角を削った首飾りの古代女も現れなかった)

……只耳を澄ましていると、僕の幻覚の余韻だろうか。清んだ透明な声だけが聞こえて来る。どこか人間離れた声だった。そして薄明かりに目が闇に馴れて来たのか、近くに古い洞穴の様なモノがおぼろげに見えて来た。雪は音もなくちらちらと降り続く。そしてまた声が。……

——敵は山から谷底へと逃げて行きましたから、……もう大丈夫。

——……あなたが何も言わなくても、あなたが考えていること、わたしには何でも分かるのですよ。……(まさか？ こんな所で女の声が、……僕は怪しんだ)

——いえ、わたしはアヤシイ者ではありません。わたしは名もないこのクニのミコ(祭祀)ですから。今、敵が逃げて行つたので、この岩穴に眠る亡者にお供え物を持って来たのです。この岩肌は無数の手形を残して。……戦いに敗れ餓えに苦しみ、命絶えた者たちが救いを求め岸壁に這い上がろうと。……その手形なのです。

……

——戦いで多くの男子を失いました。負けたら更に、「生口」（せいこう）奴隷として相手方へ差し出さねばなりません。だから男子が少なくなって困っております。ゆえに結婚も、夜這いさえ自由にさせるしかありません。……

——お互い血を流し領地争いのないよう仲立ちをするのがわたしの役目なのです。……

僕は内心ドキリとした。いくら僕が古代女好みだと言っても、それだけは……と言いたかった。

——……いえ、だからと言って、あなたを捕まえて強制したりしませんから、心配しないで。……それより、あなたお腹が空いておりませんか？ この祠には救荒食として、橡の実（中国ではダンチョ）が保存してあります。祠にはお供えしたクバの葉に包んだ橡餅があります。

僕は橡餅と交換に、僕のDNAをこのクニへ遺して行く気はない。……

と思った瞬間だった。彼女にはそれがもう通じていた。

——あなたは何も言わなくていい。何も心配しなくても、この非常食を食べて、今夜はここでゆっくりお寝みなさい。「コーエ（食べなさい）」と回りのヒトに分け与える。老いたヒトにはもっと。……それがこのクニの自然の心。……。

——雪も止みました。水はこのクニ、沢山の池があります。ここから一番近い一番大きい池は「龍神」と言って、水の神様です。夜が明けて明るくなったら、池床の回りにはミオナラやブナ、ツガ、モミジなどが水の神様と池を護っています。樹を目当てにして行きなさい。でも、もし「カエル」に出会ったら、池に帰してやってください。「カエル」は水の精霊なのです。——

彼女の声は徐々に力を失って、か細くなって行くようだった。

——わたしは、もう山上へ戻らなければなりません。最後に一つ申し上げたいことは、わたしは、「妖しい術」をつかって衆を惑わすような「鬼道」を施す「ミコ」などではありません。

——「鬼道」とは、あの世と言われる鬼界に入ってしまった人々の靈魂の通り道を言うのです。つまり亡くなったヒトとの語らいを言うのです。いいえ、ヒトの靈魂だけではありません。宇宙自然の靈魂とも語るのです。その語らいによって、精神の優しさや強さを得て、人類のみならず、エネルギーをもらうのです。……

——この地はタブーです。……入ったら出られません。……蔓橋を渡ってはなりません。……「死」は、……いつも目の前にあります。……いのち大切に。……

——ホントに……この○○の地の果てまで、あなた……よく、来て……。

声は掠れ、途切れ途切れで、力尽きたようにエネルギーを失い、やがて遠のいて消えて行った。……（声は掠れ、途切れても、波長を越えて彼女の真心は、たしかに僕の胸に伝わった）

その夜、そのまま洞穴に崩れるように眠った僕は夢ひとつ見ることなく、全ての拘束から解かれたようにぐっすり眠り込んでしまった。翌朝目覚めると、辺りに雪の降った形跡などなく、僕の体は信じられないほど軽くなっていた。磁石が一筋の明るい日差しに向いて動いた。

もし、邪馬台国が四国山上に出現したクニであり。山また山の馬の背を並べた穏やかで、おかしな無数の馬が寄り集まったような地形の。——しかも毎年山焼きをする特徴の四国山上の高地性集落が、やまとのクニであるとするれば。……（やがて、のち大和の地名は畿内へと移り、い国となる）

その太古の山人ヒト（やまとびと）の遺した、山上にひっそりと咲く一輪の山百合の花のように、相手を思いやる優しさこそ、日本人の心の奥底の空白を埋める「DNA」ではないだろうか？ ……彼らが生きた証は、封じ込められても決して消えることはない。……僕は、……僕はそう思いたかった。

宇摩郡の中でも南四国山脈の土地は果てしなく広い。そして人口は最も少ない陸の孤島のようなものだ。僕はその辺境のクニ、陸の孤島の一体どこをさ迷っていたのだろうか。

だが、その孤島から抜け出して、白みかけた闇の中から視界が開け、上長瀬付近の部落で平家の落人が祀った山城八幡神社の「神木」椎の木が落雷で焼け焦げているのを見て、長瀬をあとにした僕は、溪谷沿いの道を三十分も上流に行くと、ようやく富郷橋に着いた。

橋上に佇んで暫く溪流の烈しい清らかな水音を聞く。遥か西北の彼方に見える豊受山、南にはあの法皇山がある。

近くに幾多の伝説を秘めた女人禁制の山や古社などある。が、心惹かれつつ富郷

小学校の辺りから銅山川（伊予川）溪谷の北岸に続く林道を西へ、ようやく上長瀬部落に着いた。嶺南では稀に見る平坦地で、僕はほっとした。

地図の上では郵便局、駐在所、森林組合、後ろに金砂温泉もある。村に一軒しかない旅館「合田金四郎」という宿に泊まることにした。

風呂は宿の後ろにある金砂温泉から来る溢れる湯で、泥だらけの体を洗い流した。そして、溪流で跳ねていたアマゴと愛媛の米を腹一杯食べると、急に眠気が差して来て、とうとう忌部の奴は来なかった。明日は彼に報告しようと、彼の住所がわからないことも、日記を付けるのも忘れまどろみながら、異常な眠りに落ち込んでしまった。……

——やあ、お前僕より先に来ていたのか……？

僕は吃驚して声を掛けたが返事もなく、一足先に布団に潜り込んでいた彼は何も言わず只黙っていた。

おかしいじゃないか。そんな筈はない。しかし、たしかに此処にいるのは彼で、彼が僕で、僕が彼になって。してみると、忌部は僕だったのか……？

僕の心の中にある無意識な野心と強い願望が、忌部という人間を勝手に創造し動かしていたのか。この謎は永遠に解けなかった。

参考文献 資料

「西南四国歴史文化研究会」発行「よど」第五号 佐川印刷株式会社

「邪馬台国の全貌」中町子菊著 幻冬舎出版

「邪馬台国は間違いなく四国にあった」大杉博著 たま出版

「日本語の空間」日本人はどこから来たか？——文沢隆一著 淡水社